

気の毒な今どきの大学生

松山 伸一

「今どきの大学生は学力が低い」と言われるが、その主因は「ゆとり教育」などではなく、少子化のもとで大学入学定員が増加してきたことによる。1990年度は高卒者177万人に対して4年制大学入学者が49万人だったのが、2008年度には109万人の高卒者に対して入学者が61万人に達している。これは、団塊ジュニアが大学を去った後、18歳人口が年々減少していたにもかかわらず、逆に定員を増やして学力の低い若者までも入学させてきたことを示している。その結果、トップ校では少子化によって数が減った成績上位層だけでは定員が埋まらず、以前には合格できなかった学力の低い学生を2、3割抱え込むこととなった。中堅以下の大学では1990年頃に入学してくれた成績層の学生を今では上位校に奪われ、代わりにその下の層から学生を受け入れて教育している。これが、ほとんどすべての大学において入学してくる学生の学力が低下した原因である。少子化一定員増によってもたらされた学力低下のカラクリに惑わされてとやかく言っても、今どきの大学生が気の毒だ。

また、今どきの大学生は勉強しないとも言われる。考えられる原因として、文科省が高校で嫌いな科目は勉強しなくてよい科目選択のしくみを作った、大学が受験生を増やし偏差値を上げるために入試科目を減らした、少子化一定員増によって一生懸命勉強しなくてもそこそこの大学に入れるようになったなどがあげられよう。しかし、学生たちは文科省や大学が作ったこれらのしくみの中で正々堂々と入学許可を獲得している。本当に学生が勉強しなくなったとしても、それは良くも悪くも社会が若者をどう育ててきたかの結果であり、学生の責任ではない。そして、私が大学生になる前から、「日本の大学は入ってしまえば出るのは簡単」と言われていたことも忘れてはならないだろう。

さらに、今どきの学生がもっと気の毒なのは、以前に比べて、高校や大学で学ぶことが格段に増え、内容も深く詳しくむずかしくなっていることである。自然科学を例にあげれば、10年前は大学の1、2年生に教えていたことが今では高校の教科書に体系的に出ているし、大学の定番教科書の厚さが私の学生時代と比べて2～3倍に膨れ上がっている。学問の著しい進歩によって質、量ともに密度の高い学習を強いられている今どきの大学生が、はたして30年前の私に務まるのだろうか。

学力が低くて勉強しない学生のためにと、次々に立ち上げられる「〇〇教育」、次々に作り変えられる制度や組織などの教育改革は、「濡れ衣」を着せられた学生たちの眼にどのように映っているのだろうか。自戒の念を込めてこの拙文を書いている。

まつやま しんいち（本学理学部教授・全カリ特別教務委員）